

地域に固く根を張った 拠点となる

社会福祉法人 熊野福祉会

グループホーム下湯川苑 責任者 中岸 賢大 (老-36期、No.4913)



人口4,000人足らずの町に生まれた施設

「平成の大合併」の際中、平成17年に1市2町2村が合併して現在の田辺市が生まれた。その合併協議会の設置に遡ること10年余り、人口4,000人余であった旧本宮町に平成3年に開設したのが、私の勤務する法人の最初の施設となる特別養護老人ホーム、熊野本宮園である。現在は、特別養護老人ホーム3か所、デイサービスセンター2か所、グループホーム1か所等を経営する、地域で唯一の高齢者支援を中心とする法人である。

旧本宮町の人口は、現在は3,000人を僅かに上回る程度にまで減少した。現在の地域の高齢化率は45.4%。75歳以上の人口も29.4%に達している。林業と農業を主産業とし、近年は観光にも力を入れているものの、当時から人口の少ない中山間地に公的な資金も投入される福祉施設を開設するまでには、地元の有志による長年の辛苦の積み重ねがあった。

「一人でもやる！」法人・施設設立に向けた歩み

昭和50年代、当時の本宮町では高齢者の孤独死が年に2、3件起きていた。そうした状況に心を痛めていた本宮診療所の岩倉医師は、市内で土木建設業を営んでいた中岸 おさむ 麻に特

別養護老人ホームの必要性を説く。貧しい家庭に生まれ、家計の助けにと思春期から土木建設業一筋で歩んできた麻は、当初はそれほど真剣に受け止めていなかったものの、38歳の時、父母を亡くし自身も体調を崩し入退院を繰り返すようになり、病院のベッドの上で岩倉医師の言葉を思い出した。「自分の母親が亡くなった」ことと、本宮町で学校を卒業した子が都会へ出て戻らず、「誰からも看取られずに孤独死する高齢者」の姿が重なったという。麻は特別養護老人ホームをつくることを決意した。昭和51年のことであった。

当時の本宮町には社会福祉協議会もなく(後に平成元年に設置)、麻の福祉施設を求める訴えは町議会議員から「社協もないのに!」とはね除けられた。そこで、「急がば回れ、できることから着々と」をモットーに、麻は独り暮らしの高齢者宅を訪問して話を聞き続けた。そして昭和63年には町議会選挙に「全財産をなげうってでも特別養護老人ホームを建てる」と公約して立候補。見事トップ当選を果たす。その後、山奥の田を一枚ずつ買い求め、宅地造成をして2000坪の土地を用意した。しかし、相談に訪ねた県庁からは「人口が少ないから」と色よい返事は得られない。断られても断られても、集まった有志と知

恵を絞り、片道6時間をかけて何度も県庁へ足を運び続けた。陳情に通い始めて1年が経った頃、町内での温泉湧出をきっかけにして、法人設立の認可が下りることとなった。平成2年の春、麻は県庁に呼ばれ、県知事から「中岸君のねばり勝ちやね。」と声をかけられた。10年以上取り組み続けた夢が叶った瞬間であった。

開設後、20年以上が経つが、入所施設による介護サービスを提供するのは当法人だけである。人口減少や高齢化は続いても、法人・施設と地域との結びつきは固い。近隣の農家からの野菜の差し入れは絶えず、認知症による徘徊者の所在連絡もしせんと施設には寄せられてくる。入所者は旧本宮町在住者を中心にしながらも県内から広くあり、在宅サービスの利用者を含めて地域全体で高齢者を支えるかたちになっている。

紀伊半島大水害を乗り越えて

熊野本宮園が開設してちょうど20年目の年に大きな災難が降りかかった。平成23年。3月11日に大地震が起きた5か月後の9月初旬、台風12号がやってきた。三日三晩の大雨が降り続いた結果、本宮町中心部は泥だらけで道には厚さ20センチの泥が溜まっていた。後に「紀伊半島大水害」と命名されたこの大水害は、東日本大震災の影響が今も続いていることは言うまでもないが、私たちにとって、生活のより身近に迫った危機であった。

台風による大雨で、三重、奈良、和歌山の3県では土砂災害、新水害、河川のはん濫が相次ぎ、紀伊半島での土砂災害は3000か所以上に及んだ。土砂でふさがれ、行き場のなくなった河川の水がたまる「天然ダム」は17か所で発生。全国の死者は82名、行方不明者は16人、特に和歌山県での死者は59名となり、田辺市本宮町でも多くの犠牲者が出るようになった。東へ通じる国道では16カ所、西へ通じる国道も3カ



下湯川苑外観

所が崖崩れを起こし、私たちは陸の孤島に取り残された。町内は停電し、固定電話も携帯電話も繋がらない。熊野本宮園に唯一通じる県道も崖崩れで道路ごとともっていかれてしまった。

幸い当法人の入所者で人的被害はなかったが、家族を失った職員、家屋や財産を土砂に流された職員もいた。それにもかかわらず、職員たちは自分の家のことは放り出して施設に駆けつけて来てくれた。

指定避難所である学校の体育館に、入所者と職員でいったん避難はしたが、体育館のトイレの構造を考えるとそこに留まることは困難であり、数時間の滞在だけで施設に戻ることになった。「もしも何かあったら」と、後で消防の担当者からは厳しく叱られたが、災害避難にかかる現実的な課題として問題提起はできたと考えている。施設に戻り、停電が続く中、夜はろうそくの火をみんなで囲み、悲しみを紛らわすために冗談を言い合ったりもした。

「自己責任で歩ける」程度に道路が復旧するまで3日を要した。車が通れるようになったのはだいぶ後になる。それまでは自分たちでやることをやるしかない。ターミナル期の入居者はドクターヘリで輸送してもらい、職員は山越えをして食料を運び続けた。

水については、日頃から湧水を使っていたので確保はできた。ただし停電でポンプが動かな

い。職員は山へ水を汲みに歩いた。停電から復旧したのは1週間後であった。

この時の被災体験は今も、私たちの胸に深く刻み込まれている。現在は、備蓄品や発電機を整備し、陸の孤島になっても一定期間は持ちこたえられる体制を整えている。

熊野古道に寄せる誇りとロマン

地域にあるのは辛く苦しい話題ばかりではない。

紀伊半島の奥深い山々に囲まれた「熊野」と聞くと、修験道と悠久の歴史にロマンを感じる人は多い。熊野古道は、平安京からこの熊野大社を結んだ道である。都が東に移ってからも熊野詣では続き、江戸から船に乗って紀州藩の端（現在の三重県尾鷲市近辺）から大社に通ずる道も追加された。この山道は1000年前からたくさんの人に歩かれている誇りと伝統ある道だ。熊野詣では1000年前の平安時代に、皇族、貴族が熊野三山へ参拝したのが始まりと言われ、国内で最古の「旅行」ともいわれる。

本宮町を含むエリアは、平成16年に「紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道）」としてユネスコの世界遺産に登録されている。「巡礼の道」が世界遺産に指定された例は、世界に2例しかない。もうひとつはスペインのガリシア州サンティアゴ・デ・コンポステーラ市の「サンティアゴ巡礼道」であり、田辺市は、平成25年に同市と観光交流協定を締結した。

過去1000年間にいわゆる熊野古道ブームは3回起きている。1回目は平安時代。2回目は“蟻の熊野詣”とも言われた江戸時代。そして、3回目は世界遺産になった平成16年以降で、現在、観光は地域を支える有力な産業の1つにもなっている。

観光は、地域にお金だけでなく人も呼び込む。観光で訪れて当地の自然の美しさに惚れ込み、



下湯川苑で七夕飾りを一緒に作る

その後、移住してきた人もいる。当法人にもそうした来歴をもつ職員がいる。

地域の視点で考えると、介護や福祉も、必要なサービスを提供するばかりでなく、そこに働く人の雇用を考えても有力な産業のひとつといえる。当法人に働く職員は、正規職員、パート職員を含めて120名にのぼり、地域における存在感は決して小さくない。当然その責任も伴うと思えば、地域のためにも決して恥ずかしいことはできない。

「ありがとうやで!」を仕事の喜びに

私は、高齢者グループホームの施設長として地域で日々、充実した日々を送っている。一生懸命がんばってくれる職員がいてくれるおかげで、利用者と一緒に皿洗いや畑仕事、散歩などができる。ただ、開業して2、3年間は精神的にきつい思いをし、精神科医からは休職を勧められたこともあった。けれども利用者がいつも応援してくれ、励ましてくれたから休まなかった。ストレスを感じない仕事など世の中に存在しないのはいか。そう言い聞かせながらも、地域や現場のマンパワー不足は否めない現実である。どこかで抜本的な対策を打つ必要性も感じている。

介護の仕事は、利用者から「ありがとうやで!」といってもらえる数少ない仕事の1つである。3K職場と言われても、この地域とこの仕事に私は誇りを持っている。